

北海道自然保護協会

1976

—海鳥(知床半島)—

昭和51年10月

No. 23

協会活動状況

(特別の記事のないものはすべて植物園において)

●昭和五十一年三月十日(土)

常任理事会

出席者 石川(俊)、辻井、高畑、野田、小川。

議題

一、「自然保護講座」開催の件

第一学期は、六月、七月の毎土曜日に四回連続して開催する。会場は道新小会議室をこれに充て、先着三十名とする。

二、会報、会誌の編集方針について

三月発行予定の会報(二十一号)は伊藤前会長追悼号に、二十二号は全道自然保護シンポ特集とする。会誌十五号は、全国自然保護連合の大会を目的に「湿原」特集として発行する。

三、総会の打合わせ

五月八日(土)午後二時からの予定で会場、講演者の折衝を行う。

四、その他

「北海道の自然」シリーズの内容についての話し合いと、全国自然保護連合大会のスケジュールについて報告がなされた。

●四月六日(火)

編集委員会

出席者 石川(俊)、辻井、小川、山

口、狩野、野田。

主として「北海道の自然シリーズ」の編集方針について話し合う。

●四月六日(火) エルム会館

常任理事会

出席者 石川(俊)、辻井、野田、小川、高畑。

議題

一、「自然に親しむ会」の日程について

●四月十四日(水)

常任理事会

出席者 石川(俊)、八木、小川、野田、辻井、高畑、石川(治)。

議題

一、手稲山スキー場問題

スキー場のあり方とあわせて問題にしていくべきである等が話し合われた。

二、真駒内短絡道路問題

先に提出した要望書に対して市長からの回答があったが、事実誤認があり、早急に意見書を取りまとめることが決められた。

三、協会独自の調査について

とりあえず札幌周辺の鳥、植物、昆虫相などについて、メッシュ法などを用いた調査を継続していく方向で確認がえられた。

●四月二十四日(土)

第六十五回理事会

出席者 石川(俊)、八木、辻井、石川(治)、野田、鮫島、坂本、午来、大山、桑原、中野、山口、斎藤(雄)、高畑、門脇、(四十万谷Iオプザーパー参加)。

議題

一、自然に親しむ会のスケジュール開催のたびに案内状を送ることは事務的にも大変なので、秋頃までの分を一括して決めることにする。

二、全国自然保護大会に向けて

資金面で全面的に協力するとともに行政各種団体などにも積極的に働きかけるべきとの意見が多く出された。

三、委託調査について

本年度は日高山系の調査を、一応引受けることに決める。

四、真駒内短絡道路問題

北大苫小牧演習林にかかる高速道路問題について(門脇理事より)

六、総会の件

会場は札幌・日本生命ビルを充て、竹田津 実氏の講演とご自身の撮影による三十五ミリ映画の上映を行うこととで諒解をえた。

七、その他

なお、理事会に先立って、北海道自然保護団体連合代表・山本 正氏から全国自然保護連合大会の進捗状況についての説明を受けた。

●五月八日(土) 日本生命ビル会議室

昭和五十一年総会(別記のとおり)

●六月七日(月)

編集委員会

出席者 石川(俊)、八木、野田、山口、辻井。
「北海道の自然」シリーズと、会誌



山部の東大演習林の 自然を尋ねて

家 登 美 智 子

去る六月十二、十三の両日、山部の東大付属演習林で協会主催の「自然に親しむ会」がもたれた。十六時、富良野駅前集合には、遠くは帯広からの参加者をはじめ岩見沢、札幌から老若男女が駆けつけ、総勢二十二人。バスの待ち時間には手分けして三食分の食糧の買い出しをしたりで、小学校の炊事遠足を思わせる。

十六時発、麓郷行きはバスはわれわれの同志で一杯。街並をはずれ、緑に囲まれた道を山を越え終点につく。宿舎の演習林宿舎は、自然そのものの真ん中に調和した素朴な建物で、忘れていた土のかおり、木のかおりをおもいださせる。早速女性軍は夕食の下準備。大きな大きなガス釜でのご飯炊き。豚汁、つけもの、豆腐の冷やっこで楽しい夕食。食後のあと片づけは男性軍でやります。との心優しい申し出に感謝してお任せする。が食器を洗っておられる姿をみて、お宅では決してしないであろうに申しわけなく思え、クリと胸も痛みましたが、楽しそうに片づけをしている様子を見る、ほほえましくもあり、家に帰られて

もたまには、台所に立ってくださると奥様が感激されること請け合いです。その間にわれわれは、翌日のおにぎり作りをしたのです。

小川さんを囲んでの翌日の打ち合せ、そして皆さんが日ごろ苦心されて撮られたスライド写真を観賞し、翌朝五時に出発とのことで、早々にして床にはいりました。

朝モヤがたちこめる中を外では、もう何人かの方々が探鳥をしている。急いで時計をみると、まだ四時前である。なんということ。五時正刻に全員、演習林のご好意により配車していただいたバスに乗る。大麓山の山頂近くで下車、野鳥や植物を観察しながら、林道を下るのである。

演習林森林動物研究室の有沢 浩さんの説明と道案内で、それぞれ双眼鏡を手に鳥の鳴き声に全身を耳にして歩を進める。鳥の鳴き声という、スズメ、カラス、ヒバリ、カッコウ、ウグイス程度しかわからず興味もなかった私には、「あつ、アオジだ、クロジだ、いやミソサザイが……」などと一せいに立ち止まり耳

を傾げる様子には、驚きととまどいを感じました。

山頂から約四時間、皆さんが真剣に鳥や草花の名を示し合い、またそれを見るよきの優しいお顔をみているうちに、ああ、これこそ真の人間らしい生き方なのではと考えさせられました。

アスファルトとビルの谷間で、時間に追われながら生活をしている私達のまわりに、山部の何分の一の自然があるのでしよう。が、この山部でも年々野鳥や動物の生息数が減ってきているという、有沢さんのお話しに救いようのないさびしさを感じたのは、私だけではないと思います。

麓では、クマゲラが枯木にとまってわれわれの目を楽しませてくれ、足元にはヒトリシズカ、ゴゼンタチバナの可憐な花がほほえまかけてくれました。

初めての参加でしたので驚きと反省の二日間でしたが、帰りの汽車の中で「大変でしたね、遠いところを」と労をねぎらう私に「いや、おかげさんで天気もよかったです、前回より多く鳥も出てきてくれて、楽しかったですよ。また頼みますね」といつてくださいました。

次に訪れるときにも、今日逢った鳥や草花が一つも欠けることなく再会できることを楽しみに、またそのように努力したいと思えました。不慣れな私に親身なご協力をくださいました皆様へ感謝し、報告といたします。
(協会事務職員)

十五号(湿原・特集)の編集経過について協議。

●六月二十二日(火)

編集委員会

出席者 野田、辻井、山口、桑原、狩野

「北海道の自然」シリーズの打合わせ。

●七月三十一日(土)

常任理事会

出席者 石川(後)、八木、野田、石川

(欠) 辻井(佐藤II オブザーバー参加)

一、全国自然保護連合大会に向けての報告

北海道自然保護団体連合事務局長・佐藤佑一氏から報告を聞く。

二、大会に対する協会の対応について

剣路巡検には理事会から会長、石川

(欠)、辻井の三名が参加する。会誌十

五号を剣路自然保護協会に届ける。

三、「自然保護」講座について

会場について再考してはどうかという意見と、講座の要約を会誌に再録してはという要望が出された。

四、その他

●自然保護講座(第二期)開催

第二期の講座として、環境アセスメントの手法、問題点を中心としてプランを組みました。十一月十三日から十二月四日までの、毎土曜日午後二時から日生ビル(北三四四)九階に会場を設けます。詳細については近日、新聞などで発表の予定。

自然保護大会釧路湿原巡検開催

自然保護大会を機に道内各地で巡検が行われたが、本協会の支援した釧路湿原巡検は地元釧路自然保護協会、釧路市立郷土博物館、釧路市教委、釧路市の周到な準備と配慮によって五日の巡検、同夜の講演会、レセプションを滞りなく終了した。

巡検は朝九時博物館前をバスで出発、小川博物館の案内によって湿原を大築毛、鶴公園、北斗、鶴居、コッタロ、トウロ湖の順に周回し、途中、北斗では沢四郎館長補佐による遺跡の説明、北斗高台では岡崎教育大教授による湿原の地質、地形学的説明を、またオンネナイでは田中教育大教授の植物学的説明を受けた。オンネナイで昼食、今年の水不足で高層湿原も水位が下がっており、ノーマルな状態とはいえないかったが、観察にはかえって幸いした。

午後は幌呂川、雪裡川、久著呂川の改修状況を視察、博物館の橋本学芸員の説明があり、そのあとコッタロ経由で塘路湖の標茶郷土館に向ったが途中、コッタロ湿原で野生のタンチョウ三羽を見るこ

とができた。
標茶郷土館を見学、小憩後釧路へ向い、車中、永田洋平氏のタンチョウのお話を拝聴、午後四時に釧路帰着、一三〇キロの巡検を終った。
夕刻五時から市内のホテル市川で、元

北海道農試土壌研究室長として北海道泥炭地調査の草分けの一人・頼尾春雄氏と、長野県自然保護連盟副会長として美ヶ原の保護にうちこんでおられる青木正博氏の講演、そのあと、レセプションにはいった。釧路市長、標茶町長の挨拶、本州各地からの来会者者のテーブル・スピーチをはさみ、談笑盛会の裡に八時半散会。
本協会からは石川会長、石川 治、山下 巖、韭沢千代、辻井達一などの会員が参加した。

なお、巡検の前夜(四日)、折りから来訪途次の全国自然保護連合の中村芳男理事長、金田平事務局長を釧路自然保護協会首脳部、辻常任理事と漸次会談の機会があった。釧路湿原の保全については国際湿原条約の批准がもっとも望ましい

昭和五十一年度総会開かれる

昭和五十一年度の総会は五月八日(土)午後二時から、札幌駅前の一「日本生命ビル」の会議室で開かれ、昭和五十年度の収支決算報告ならびに新年度収支予算案が審議された結果、原案どおり承認された。事業計画としては、初の試みである

自然保護講座の開講、自然に親しむ会の定期的開催、さらに独自調査の実施などを提案して承認された。
総会のあと、キタキツネの研究者として知られる会員の竹田津 実氏が、「オホーツクの自然とキタキツネ」と題する

昭和50年度収支決算書			
(自昭和50年4月1日 至昭和51年3月31日)			
収入の部		支出の部	
法人会費	1,440,000	会議費	260,521
個人会費	882,900	旅費	159,690
雑収入	115,020	会誌発行費	950,489
調査費	1,300,000	通信費	166,035
預金利息	22,290	通会費	4,000
繰越金	940,470	交諸人件費	25,000
		事務費	451,600
		図書資料費	122,414
		調査費	138,250
		雑費	1,300,000
		繰越金	64,790
計	4,700,680	計	1,057,891
繰越金内訳		道銀	313,463円
		現金	50,720円
		計	1,057,891円
		拓銀	593,303円
		振替	100,405円
昭和51年度収支予算書			
(自昭和51年4月1日 至昭和52年3月31日)			
収入の部		支出の部	
法人会費	1,500,000	会議費	330,000
個人会費	1,200,000	旅費	280,000
雑収入	400,000	会誌発行費	1,430,000
預金利息	30,000	通信費	280,000
前期繰越金	1,057,891	通会費	10,000
		交諸人件費	25,000
		事務費	550,000
		図書資料費	80,000
		全国大会費	100,000
		出版費	400,000
		調査費	280,000
		雑費	200,000
		予備費	20,000
計	4,187,891	計	202,891
			4,187,891

講演と、自身が撮影された三十五ミリ映画の上映を行い、大好評であった。引き続き講演者の竹田津さんを囲んでの懇親会に移り、盛会のうちに総会行事のす



陳情書、要望書

意見書、回答文書

真駒内保健保安林内の連絡道路に関する札幌市長の回答に対する意見書

H NCS 第一二七号

昭和五十一年五月二十日

札幌市長 板垣 武四殿

札幌市議会議長 松宮 利市殿

北海道自然保護協会

会長 石川 俊夫

真駒内保健保安林内の連絡道路建設問題に関する昭和五十一年二月二十日付、当協会の要望書に丁寧な御回答をくださいましたことは、じつにあり難く存じております。

しかし、ますます発展をつづける大都会札幌市にとっては、ますます価値が高く、必要性を増すものとして指定された市内の保安林、鳥獣保護区などの緑地を破損したり、減少せしめることは札幌市の環境保全のため、できるだけ避けるべ

べてを終了した。
なお収支決算書および収支予算書は、別掲のとおりである。

き重要な問題でありましょう。

そのため、本件に関して慎重に検討を加えた結果、昭和五十一年二月二十五日貴職の回答内容では到底同地域の環境保全を全うすることは、困難であるとの結論に達しました。

その理由は次のとおりです。

(一) 回答によりますと連絡道路予定地は、小面積で自然価値の乏しいことから保安林の自然を著しく損うものではないという主旨になっていきます。しかし保安林であると同時に鳥獣保護区にも指定され、これまで緑化事業が進められてきた当該地域について自然保護、緑化面からの配慮に乏しいこと。

(二) 連絡道路の開設によって、現在ダンプ公害に苦しめられている道路沿線の騒音が軽減されるかのように主張しておりますが、現在でも十数カ所に及ぶ真駒内周辺の碎石、火山灰採集場が無規制のまま放置されている限り、ダンプ

公害の他地区への転移に加えて将来かえって騒音、振動公害の深刻化が予測されること。

(三) 連絡道路が必然的に車の流れを変化させ、その結果、保安林内および周辺地域の自然生態系、社会環境に広汎な影響をおよぼすことが想定されているが、その方面の総合的施策がならん提示されないまま計画が進められていること。

よって当協会は、この問題に対するより一層の理解と、問題解決の方向をめざし、次の事項について早急な実現が計られるよう要望いたします。

(一) 周辺地域における碎石、火山灰採集の実態調査と交通量調査を実施し、地元住民および関係団体に提示する。

(二) 連絡道路予定地点を含めた保安林全域ならびに碎石、火山灰採集場の現地調査を市、地元住民、自然保護団体の三者合同で実施する。

(三) 以上の結果をもとに、公開の場において上記三者が話し合いをもつ。

なお、今回の再回答が遅れましたが、貴職の回答の内容を諒解したことでありますので、念のため申し添えておきます。

(資料添付 真駒内地図 会報二〇、二一号)

写提出先

北海道林務部長

石狩支庁林務課長

北海道生活環境部長

真駒内緑ヶ丘保健保安林にかか る連絡道に関する意見書

H NCS 第一二九号

昭和五十一年六月十八日

北海道知事 堂垣内 尚弘殿

北海道自然保護協会

会長 石川 俊夫

当協会では、昭和五十一年十一月二十三日の現地調査をもとに十二月五日付けで知事宛に、連絡道反対の要望書を提出した。

今回五月二十九日再び現地調査をおこなって、次のような問題点と対策案をまとめた。

問題点

(一) 保健保安林は住宅密集地帯であり、全市民の憩いの場である。しかも社会的に最も弱い立場にある真駒内養護学校障害児の機能訓練の場にもなっており、ダンプ公害のしわよせは絶対避けなければならないところである。

(二) 上町五丁目住民にとっては、通行量の多い五輪大橋方面からのダンプ公害の対策としてこの連絡道は意味がない。

(三) 現在の真駒内、滝野線から五輪通りへ出るルートは、二本とも根本的欠陥があるわけがなく、これを使えば新しい連絡道の必要はない。

(四) 連絡道をつくって駒岡地区火山灰ダンプを全部真駒内、滝野線を通すと道路幅からいって、この地域のダンプ公害は真駒内団地より大きくなると予想される。

(田)真駒内地区におけるダンプ公害の源は特定の業者を指摘できるので、対策の費用はすべて公害発生企業が負うべきである。

(内)駒岡地区や砥石山付近の乱開発の状況や保健保安林の機能など、地域全体の環境保全調査がおこなわれていない。

対策案

連絡道建設の代案として、次のような対策が考えられるので、市当局の行政責任において根本的に再検討するよう指導ねがいたい。

(一)この地域における採石、採土のダンプ運搬総量を制限する。

(二)大型車の通行にあたっては時間帯を制限し、騒音振動を避けるための速度制限をおこなう。

(三)運搬が一つの道路に集中しないよう分散させる。その場合、次のようなルートが考えられる。

(a)真駒内駅前通り

(b)真駒内、滝野線を油沢経由または五輪通りの下を通り、一担平岸線に出たあと五輪通りに入るルート。

(c)駒岡採土現場から精進川東側台地を通って、油沢に至るルート。

(四)Cルートについては勾配、カーブ、道幅、路面など、改修すべきところもあるが、いずれも技術的に可能である。費用については公害企業負担とすべきである。

(五)採石、採土場の位置と規模およびその搬出ルートと現状の道路状況、公害発生状況などを専門家に調査してもらい、

対策案を検討する。

これらの対策を講じれば、保健保安林を通る連絡道は不要であるというのが本協会の意見である。

◆エルザの会発足

本協会誌に「世界の野生を守る」を連載された藤原英司さんと、ムツゴロウの名で知られた畑 正憲さんが発起人として提案されたエルザの会(正式名称はエルザ自然保護の会)が、去る六月二十四日に設立総会を開いた。エルザは、藤原氏の訳出で日本でも知られるようになったアダムソン夫人の有名なライオンの名である。

エルザの会は事業として動物だけでなく、植物を含めての環境の保全活動、自然保護教育、海外の「エルザ野生動物基金」を含む自然保護関係団体との協力・交流などを掲げている。

会費は成人会員年額一口二〇〇〇円、若年会員(十五才以下)一〇〇〇円、法

人会員五〇〇〇円。

事務所は東京都中央区銀座五―一〇―六 EDC内。

◆出版物のおしらせ

●「釧路の自然」第3版

釧路自然保護協会の編集した標題のパンフレット(地図付き)が発刊された。五一ページ、釧路湿原を中心とし、釧路

地方の地形、地質、植物、動物、先史人と遺跡、景勝地、施設などが要領よくまとめられている。

この「釧路の自然」は第一版が四十七年に、第二版が五十年に発行され、好評だったもので、今回、自然保護大会に先き立って行われた釧路湿原巡検の開催を機に第三版として新たにまとめられたものである。頒価一部五〇〇円。申込みは当協会事務局へ。

●写真集「花・釧路湿原の四季」会員・荒沢勝太郎氏による湿原の花の美しい記録。申込みは釧路市緑ヶ岡五―二―一六の著者宛。七〇〇〇円。

荒沢さんは、釧路湿原の花を追いつづけ、達意な文章で湿原の自然を詠いつづけた。このたびの出版は、その一つの集大成というべきものである。

●「室蘭の植物」会員・原 松次氏(室蘭文化女子短大教授・植物学)著、噴火湾社刊行。

測量山を中心として、室蘭の植物がカラー写真で美しくまとめられている。鉄の町・室蘭にこんなに多くの植物が、美しい花があったかと思わせる。著者は胆振地方の植物に詳しく、このほかにも胆振の植物についての著者、報告があり、室蘭植物同好会を主宰。本書の申込みは室蘭市中央町二―七―一三背文字屋書店内、噴火湾社。振替小樽七九四〇。一九〇〇円。

●フィールドガイド根室「根室の鳥とけもの」一〇〇〇円、「根室の草花」一〇〇〇円、「根室の風土と自然」八〇〇円。

一連のフィールドガイド根室シリーズで、根室市の「フィールドガイド根室」制作委員会で企画・編集・発刊されている。会員・三浦二郎氏の主宰する根室自然保護教育研究会のメンバーが、有力なスタッフとして加わっている。申込みは協会事務局へ。

●誌合本の作成について

誌合本も創刊以来十五号を算えましたので今般、一号から十号までの合本を作成しようと思います。一巻六千円くらいになる見込みですが、ご希望の方は事務局宛、お申込みください。ただし、創刊号はすでに品切れになりましたので、この分は複写になります。なお、創刊号をお持ちの方は、おとどけくださいれば完本と致します。全号(一号―十号)お手持の分を合本になさることをご希望の向きには、製本費四千円(見込み)でお引受け致します。

合本は、十二月までのお申込みをとりまとめのうえ、一月末に出来上がり予定ですが、数があり少ないときは単価がひどく高くなることも考えられますから、その場合はとりやめになるかも知れません。

なお、創刊号を余分にお持ちの方は協会で買上げさせていただきますから、なるべくお寄せください。

物故者 館脇 操氏

本協会会員、北大名誉教授・館脇 操氏は七月十八日、心不全のため札幌大附属病院で逝去された。同氏は植物学の権

感として知られ、本協会の前身としての
(第一次)北海道自然保護協会の設立に
努力された。協会として謹んで哀悼の意
を表する。

◇「自然保護講座」

アンケートのまとめ

先ごろ開かれた自然保護講座の最終日
(七月十七日)にアンケートを配布し、
質問事項に回答していただいた。回答者
の年令は二十二歳から七十三歳までと幅
広く(平均年令は四十一・五歳)、年代
別では三十歳代が八名で過半を占めた。
なお、回収できたアンケートは十五名分
であった。

一、「この講座を何で知りましたか」

三名が新聞記事(北海道新聞)と回答
したほかは、残り十二名が協会の会報と
答えた。

二、「何回受講しましたか」

四回全部が七名、以下三回が五名、二
回が二名、一回のみが一名であった。

三、「開催日時に関するご意見」

今回実施したとおり、土曜日の午後で
よいとするものが八名で、過半を占めた
が、平日の開催を希望するものが三名あ
った。

四、「会場についてのご意見」

部屋の広さ、交通の利便などの理由か
ら八名がこの会場(道新小会議室)で問
題なしとしたが、「騒音が多い」「スライ
ドが使えず不便」「少々狭いのでは」な
ど意見もあった。

五、「費用についてはどう考えますか」

有料(一回につき百円〜五百円)にす
べきというのが二名、どちらでも構わな
いが一名で、あとの十二名は無料を希望
した。

六、「テキストについてのご感想」

「よくまとまっていたが、もう少し詳
しく」「読みにくい部分があった」など
の感想もあったが、全体的にはおおむね
良好とする意見が大半であった。

七、「秋に第二学期を予定していますが
希望するテーマ、講師など」

「調和のとれた開発をするという開発
側の話も」「環境アセスメント」「各国の
自然および自然保護」「講義と野外での
実地研修を平行して行なう」「地域の緑
化について」「自然保護思想の発展」な
ど具体的な意見が多く示され、数人の講
師名があげられていた。

八、「卒直にいつ、講座全体の印象は
どうでしたか」

「参加者をもっと増やす努力を」「日
常的なテーマを取扱って欲しい」「野外
で開催することも検討してみたい」「ス
ライドを使った方がよい」「討論をもっ
と深めて欲しい」「時間が少なかった」
など多岐にわたる要望が出された。

とりまとめ結果の概略は以上のとおり
で、おおむね好評を博したと判断できる
一方で、今後に残された課題も多いと思
われる。一番の問題はP Rの仕方につい
てである。定員三十名に対して、毎回二
十数名の受講者しかなく、P Rの不足を
痛感しないわけにはいかなかった。

会場の問題も考えさせられた。今回の
会場は札幌のほば中心にあり、交通の便
などの面で申し分なかったが、騒音がか
なり大きかったり、スライドが使えな
かったり、講座を開くには必ずしも好適
の会場とはいえなかったようだ。会場の
選定に当たっては、室内の配置も含めて、
もうひとつ工夫が欲しかったように感じ
られる。

講座の内容については、やはり個別的
かつ具体的内容の講義を希望する声が圧
倒的に多く聞かれた。当初から第一期
は各分野を総論的にとりあげることとし
てはいたものの、野外研修を望む要望と
あわせて、今後の運営にとり入れる必要
があるだろう。

いずれにせよ、この種の事業は本協会
にとつて初めての試みであるだけに、出
された意見、要望を十分配慮するととも
にさらに検討を深めて、第二学期以降の
運営に生かすよう努力したい。最後に本
講座実施に当ってご協力下さった方々、
ならびにアンケートに回答して下さいさ
す。各各位に、厚くお礼申し上げます。
(小川 巖)

・事務局から・

本年度会費納入について、前会誌
と同封にて請求書、振替用紙をお送
りいたしました。お忘れの方は、お
早く納入くださるようお願い申しあ
げます。

□ 編集後記 □

八月八日、九日の二日間、札幌で第六
回全国自然保護連合大会が開催されたこ
とは、会報あるいは新聞報道などを通じ
て、大部分の会員が知っておられること
と思う。遠くは九州、四国からの参加者
も含め、三百人以上の出席者があったと
いうだけあって、予想以上の盛り上がり
をみせた大会になった。

この大会の主管団体である北海道自然
保護団体連合から大会の全日程を網羅し
た詳細な報告集が、年内には刊行される
と聞いている。第三回の出羽三山大会を
除いては、全国大会に関するまとまった
報告がなく、その場限りの大会に終っ
てしまっている感じは否定できない。

記録の積み重ねが運動を質的に高める
うえで果たす役割は大きいだけに、貴重
な資料となつて今後の運動に資するに違
いあるまい。規模はずつと小さいが、こ
の会報も同じような役割を担っている。
そして自然保護の議論が、このような記
録性のうえに立つて活発になされること
を期待したい。
(〇)

昭和五十一年十月十日発行

札幌市中央区北二条西八丁目

北海道大学植物園内

発行所 北海道自然保護協会

電話(三三)〇〇六六番

振替口座小樽四〇五五番

発行人 石川 俊夫

印刷 札幌印刷株式会社